

ギーを与えて下さっている。これからも教員、職員と学生が一丸になって、本学科歴史の新たな一頁を創っていく所存である。

生物資源管理学科のこの1年

須戸 幹

生物資源管理学科長

学生の動向

2015年3月に卒業生61名を送り出すことができた。就職した学生は37名で、うち公務員は5名であった。また、大学院には本学10名、京大3名、東大、名大、神戸大、大阪府大、奈良先端に各1名が進学することになった。それぞれの就職先、進学先で、本学科で学んだことを基礎としてますます活躍されることを期待している。

これまで就職活動は、3回生の12月に就活解禁、4回生4月に選考開始、10月内定のスケジュールで動いてきたが、これが最後になる学年かもしれない。例年通り、学生が内々定を得た時期は4月から年明け後までと幅広い。本学科は卒業研究が農事歴とともに進む場合が多いため、就職活動と実験・研究が重なる。それにもかかわらず卒論発表会で全員が1年間の成果を発表できたことは立派であると思う。

一方、就職希望者に対する内定率は86%であった。個別に事情があるため単純に比較することはできないが、過去5年間の90%以上と比べて今年は低い数字となった。学生個人の希望を踏まえつつ、就職希望者に対しては就職支援に対する教職員のより一層の努力が必要であることを痛感している。

入試倍率は前期試験が3.4倍、後期試験が14.4倍で、例年並みの結果になった。龍谷大学が瀬田キャンパスに開設した農学部募集が今年度から始まり、受験生の競争を心配していたが、入試倍率をみる限り初年度は大きな影響はなかったようである。しかしこのことは、「生物生産と生物機能を適切に制御、管理する知識と知恵を学び、循環型社会の形成を目指す」をキャッチフレーズに、これまで以上に本学科の魅力を発信していく必要性をあらためて認識するきっかけとなった。

学科の動向

今年度は、個体群生態学・行動生態学分野の高倉准教授が4月に着任された。本学科には昆虫、爬虫類、哺乳類などのさまざまな動物に興味を持つ学生

も多いが、経験と実績のある高倉先生が赴任されたことは心強い限りである。

一方で、岡野先生、小谷先生、上田先生が定年退職されることになった。3名の先生方はいずれも県立短期大学時代から長年にわたり教鞭をとってこられた。県立大学では、岡野先生は家畜の栄養生理機能、小谷先生は微気象学的観点から見た物質輸送、上田先生は土壌微生物と湖沼環境をそれぞれ柱として、さまざまな研究活動を精力的に行い、多くの卒業生、大学院生を送り出された。また、学生指導、大学運営にも多大なご尽力をいただいた。3名の先生方が一挙にご退職されるのは痛恨であるが、今後はこれまでのよき伝統を守り、さらに発展させることが残った教員と新たに赴任するメンバーの責務であると考えている。

環境科学研究科

環境動態学専攻のこの一年

鈴木 一実

環境動態学専攻長

2014年度も環境動態学専攻における学生の出入りは比較的順調でした。2014年4月の博士前期課程への入学者は15名と募集人員を3名下回る結果となりましたが、博士後期課程へは3名が入学いたしました。2015年3月の博士前期課程の修了者は22名で、内訳は生物圏環境研究部門：3名、生態系保全研究部門：12名、生物生産研究部門：7名でした。4月以降の新しい環境でのご活躍を祈ります。また、博士後期課程では4名の方が晴れて学位を取得されました。渡部俊太郎さん（Multi-scale genetic structure and reproductive characteristics of *Machilus thunbergii* Sieb et Zucc）、金尾滋史さん（琵琶湖周辺域における水田利用魚類の保全生態学的研究）、舟尾俊範さん（ナマズを中心とした水田利用魚類の繁殖生態および保全に関する研究）、殷 安斎さん（Dinoflagellates from Hainan island : Potential threat for transporting harmful algae from Hainan to Japan）の4名です。これまでのご努力に敬意を表すとともに、今後のご活躍を期待いたします。一方、2015年4月からは博士前期課程へ20名、博士後期課程へは5名が入学あるいは進学する予定です。

教員にも若干の入れ替わりがありました。2014年4月には高倉准教授を迎えることができました。

一方、2015年3月には長い間大学院の教育・研究にご尽力された、生物生産研究部門の岡野教授、生物圏環境研究部門の小谷教授、上田准教授の3名の先生方を送り出すことになりました。岡野教授は昨年ご退官された沢田先生と同様に、ご退職後もひきつづき客員教授の立場で科研費のご研究に従事されるということです。3名の先生方の今後のさらなるご活躍をお祈り申し上げます。また、2015年4月からはあらたに3名の先生方をお迎えすることが決定しています。なお、たいへん残念なことです。生態系保全研究部門の浜端先生が昨年7月に逝去されました。本学ならびに前任地の滋賀県琵琶湖研究所（現琵琶湖環境科学研究センター）において熱心に琵琶湖とその集水域の研究に取り組んでこられた先生のあまりに早い旅立ちは本学にとってたいへんな損失であり、残念なことと言わざるを得ません。つつしんでご冥福をお祈りしたいと思います。

今年度から従来の研究科長・専攻長連絡会にかわる大学院教務連絡会が正式に発足し、全学のすべての研究科長、専攻長が出席し、大学院の教務を中心とした様々な懸案事項を協議する場が設定されました。今年度に議論してきた項目はおもに①大学院課程における秋入学について、②大学院の早期修了に関する内規について、③博士号の学位審査基準と審査プロセスの公表について、④博士後期課程における学部等の授業科目の履修について、⑤大学院の学位授与方針（ディプロマポリシー）および教育課程編成・実施方針（カリキュラムポリシー）について、⑥大学院修了生および修了時アンケートの実施について、⑦先取り履修制度について、⑧成績評価の表示およびGPA制度について、でした。ひきつづき次年度も協議を続ける案件もありましたが、③～⑤については決定され、次年度の大学院の履修の手引などに記載される運びとなりました。なお、専攻会議は昨年度と同様に原則として奇数月の第一木曜日に計6回開催し、大学院入試（9月募集）の合否判定のための臨時専攻会議を1回開催しました。

履修の手引に掲載することとなった。また、先取り履修制度の導入について各研究科、各専攻に検討が求められ、本専攻では導入しないとの意見を表明したが、来年度より全学での導入が決定した。なお、先取り履修制度を実施するか否かは、各研究科、各専攻の判断に委ねられるとのことである。さらに、成績評価の表示およびGPA制度についても協議が行われている。

本年度の博士学位の授与者は、地域環境経営研究部門の2名である。岩見麻子さんが、6月19日の博士学位論文報告会を経て、「公共事業計画策定過程の議事録に対するテキストマイニングによる議論の構造の把握に関する基礎的研究」という論文題目で、7月31日に博士学位を授与されている（審査委員長井手教授、委員近藤教授、香川准教授）。また、松優男さんが、2月23日の博士学位論文報告会を経て、「環境用水の導入と定着過程における資源管理のあり方に関する研究」という論文題目で、3月23日に博士学位を授与されている（審査委員長秋山教授、委員井手教授、香川准教授）。

学生数（平成26年5月1日現在）は、地域環境経営研究部門が、博士前期課程9名（M1が3名、M2以上が6名）、博士後期課程3名（D2が1名、D3以上が2名）であり、環境意匠研究部門が、博士前期課程37名（M1が17名、M2以上が20名）、博士後期課程が4名（D1が1名、D2が2名、D3以上が1名）である。例年のことではあるが、地域環境経営研究部門の受験者を増やしていくことが課題である。

博士前期課程の修了者は、地域環境経営研究部門が5名、環境意匠研究部門が17名である。

環境計画学専攻のこの一年

村上 修一

環境計画学専攻長

本年度は、大学院教務連絡会が定期的で開催され、大学院教務に関する動きが見られた。これまで明文化されていなかった博士号の学位審査基準（論文審査基準含む）と審査プロセスを策定し、来年度より